

安東次男著作集

第一卷

安東次男著作集 第一卷

青土社

安東次男著作集第一卷

© 1977 Seidosha

昭和五十二年二月二五日印刷

昭和五十二年三月二五日 限定一〇〇〇部発行 0390—900018—3978

定 価 四九〇〇円

著 者 安東次男

発行者 清水康雄

題 字 加藤楸邨

発行所 青土社 東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル (電)二九二―七〇七六

振替東京 9-192955

印刷所 大盛印刷

製本所 美成社

第一卷
目次

六月のみどりの夜は 定本 7

花々	9	佐渡	14	黄金風景	19	緩衝地帯	22	危険信号	25	片腕	29
北緯三十八度線	34	六月のみどりの夜は	40	戦場が原	45	テルコとナナ	50	故郷のなかの			
ONCE UPON A TIME	53	薄明について	56	大古墳	66	女たちへの讃歌	94				
異国にて	78	にわたりの歌	84	農民コミュニストの貌	91						
シャン・ド・マルスの歌	103	ビールと花とうつとりとした風景	109								

蘭

死者の書	115	海戦	119	死刑宣告	123	触手となった耳の歌	129	証人	132	樹	
木開花	136	蘭	138	磔像	140	卵	142				

秋の島についてのノオト 145

日本の梅雨	147	秋の島についてのノオト	150	石	153	罰当り	157	夏まで	161
ぼくの名まえは	164	Alternation	167	橋	169	大洪水	171	島	173
抒情的 contagion	175					生者と死者の			

人それを呼んで反歌という 181

CALENDRIER 定本

氷柱	184	みぞれ	186	白魚	188	道化	190	鎮魂歌	193	球根たち	195	年齢	
について	198	唇音	200	厨房にて	202	碑銘	204	夕立	206	調理場	208	食	

卓にて、夏の終りに	210	腐刻画	210	人それを呼んで反歌という	214	ある静物	218
CALENDRIER	補遺 221						
斬られた首	222	いちまいのナイロンで	224	樹木	226	残雪譜	226
藤原宮址にて	233					枝おろし	231

裏山 235

裏山 237

旅信一束 251

木橋 265

水の音 281

寒の内 297

無明 311

塔なき国 325

野うさぎ物語 フランシス・ジャム 347

詩篇——一九二〇年 T・S・エリオット 409

ゲロンチヨン	411	一冊のベデカーをもったバーバンク、葉巻をくわえたブライシュタイン	418
スウィーニー・イレクト	422	料理用卵	427
河馬	437	支配人	431
レストランで	441	不死のささやき	444
		エリオット氏の日曜の朝のお祈	435
		雑種の雑種	433
		蜜月	435

り 448 ナイチンゲールたちに囲まれたスウィーニー 452 訳者註 456

エリオール詩抄 ポール・エリユール 467

刑 469 軽やかに 461 ぼくはこの詩が好きだ 464 必要なもの 466 心配 468
ぼくは、ぼくは断言する…… 472 かくも陽気なパリ！ 474 ぼくらの死 475 雨 468
黄昏 478 目的へ 479 ぼくの上に彼女が…… 480 悲しみの夜番のように…… 482 恋 477
の色 赤よ 484 時もなく 486 ぼくらは存在する 491 自由 495 時を停める 503
日曜の午後 505 罪ではないのか？ 508 灯をつつめ 509 告知 510 勇気 512
戦争の七つの愛の詩 516 殺す 529 恍惚 550 八月盛夏 531 生きさせる 534 一九四四年四
月パリはふたたび息づいた 547 訳者註 553 訳者註 556 へ詩は実用的な真実を目的としなければならぬ

安東次男著作集 I

六月のみどりの夜は

定本

花々

陽は温暖に降り酒ぎ、
風は花々揺つてゐた

中原中也

ぺしゃっというのは

おれの

つぶれるおとだ

ぺしゃっというのは

かこの

おれの

にんげんのなかに

いすをもたなかつた

おとだ

それはこうそくどきかいとベルトのなかで
はかれた

みじゆくなおうとのおとだ

それはけつしてみらいえいごう

ほろんではならない

なものかであることを

おれにおしえ

ほろんでしまつて

もうなにもいえなくなつた

なかまの

それこそしゃつとした

こえやからだのいちぶぶんが

なんのためにほろんだのかを

いやおうなしにおしつけてくるおとだ

そとでできいろいかぜがふき

うすつぺらなトタンいたの

やねがめくれ

しやりんのはずれたリヤカーが

ひつくりかえり

いんしょうてきにひんまがつて

さびつちよろけの

てつのぼうが

ほねのようにあそんでいるが

それだけではなんということも

ありはしない

こんりんざいありはしない

ひはおんだんにふりそそぎ

かぜははなばなゆつてゐるが

それだけでも

どうなるものでもない

まだまだどこかに

しやくねつのおびもあり

そこにみちみちた

くらさもあり

そのみちみちたものに

がむしやらにべしゃっというおとが

かさなりあいながれでた

どろどろしたものに

あいつはうめきながら

ほんとうにべしゃっとなつてしまつたのだ

ということをまのあたりにじかにみて

ほろんだのは

おれやおれたちの

なかまではないということ

をわかつたら

あいつがもつていた

うぶさにかけて

しょうのないあいじょうを

もいちどしゃんと

しなおすことだ

そんなときだ

ほんとうに

ヒガオンダンニフリソソギ

カゼガハナバナユツテイルノハ。

佐渡

眼鏡は十米に一度は拭わねばならず
下駄の鼻緒はしめなおさねばならず
潮しぶぎにかきくもらされるのは
なにかと問わねばならず

おれは歩いた

たえず右頬に雨と嵐をうけて

そしておれは知つた

おまえには